

会報 札幌くらぶ

2023年 8月 第102号

編集・発行／札幌くらぶ 〒064-0931 札幌市中央区中島公園 1-15 札幌事務局気付
ホームページ <http://sakyoclub.net/sakyoclub/>

2023年度 札幌くらぶ総会を開催しました

去る6月25日(日)中島体育センター講堂において「2023年度札幌くらぶ総会」が開催されました。対面での総会は新型コロナウイルス感染症のため2020年度から見送っており、3年ぶりの開催となりました。

参加者は113名(出席22名、委任状91名)でした。上田文雄会長が急遽欠席と



西川吉武副会長



札幌交響楽団専務理事 鳥居和比徒氏

なったため、開会の挨拶は西川吉武副会長が行いました。札幌くらぶ28年の歩みと札幌との関わりについて話され、そしてこの総会を今後の活動の糧にしたいと、挨拶されました。続いて来賓の札幌交響楽団専務理事鳥居和比徒様よりご挨拶をいただき、楽譜支援、中学生招待事業、サロンの楽員によるミニコンサートの開催などについて謝辞がありました。

その後議案審議に入りました。

議案第1号 2022年度の活動と会計収支決算について事務局長より説明し、その後会計監査報告がなされました。審議の中で、30年記念事業費の支出が予算10万円に対して極端に少ないことについて質問があり、コロナ禍の中で取材活動が十分に出来なかったことが説明されました。また、パトネージュの年会費とは何かとの質問に対しては、札幌支援の一環として札幌くらぶが毎年札幌の維持会員になっていることが説明されました。以上の審議を経て、議案第1号は



全会一致で承認されました。

議案第2号 2023年度の活動計画(会計予算)については全会一致で原案どおり承認されました。

議案第3号 会則の一部改正について武藤義典副会長から

説明がありました。会則改正の概要についてわかりやすく説明してほしいとの要望を請けて、「改正は現状が中心である」ことが説明されました。貴重な意見もあり、活発な討議を経て議案第3号は承認されました。詳細は、改正された「札幌くらぶ会則」を配布しますので参照ください。

議案第4号 役員改選

については、議案書に候補者として記載されていた鈴木美保副会長から直前に辞退の申し出があり、候補者から除いて提案されました。新役員に立候補者がいない事を確認して採決を行い、原案どおり改選されました。

閉会の挨拶は武藤義典副会長が行い、活発な意見をいただき大変有意義な総会になったと礼を述べ、閉会しました。

このあと清々しい初夏の中島公園を横切り札幌定期演奏会に向かいました。ピアノリストの反田恭平氏との共演によりキラキラは満席となり、札幌くらぶにとつて忘れ得ぬ演奏会となりました。



テラスレストラフでの交流会

終演後「テラスレストラン Kitara」で、札幌事務局長の多賀登氏も参加されて交流会を開催しました。久しくお会いすることが出来なかった竹津香苗様(元札幌事務局長、故竹津宜男氏夫人)をはじめ懐かしい顔ぶれが揃い、さらに反田氏の演奏に興奮冷めやらず飛び入りした参加者もあり、札幌談義に花を咲かせました。グラス片手に和やかに歓談し盛会のうちに終了しました。

札幌くらぶ 事務局長

高木誠一

9月～11月 定期 Concerto 定期演奏会

演奏会を楽しく聴くために

八木幸三（札幌くらぶ顧問）



マティアス・パーメルト
2022年5月札幌定期より



リーズ・ドウ・ラ・サール
©Stephane Gallois

く聖者のような静けさをたたえた人物だった。しかし、確固とした信念を持ち、当時のフランス音楽界とは一線を置き、衰亡に瀕していた古典主義的な純音楽をフランスに復興することを理想としていた。彼の唯一の交響曲は、自身がオルガニストでもあったためかオルガニックな重厚

な響きや深い精神性を秘めている。この曲の大きな特徴は、全楽章を通して3個の動機によって構築される循環形式になっていることだ。終楽章で、それまでの楽章の主題が再現され全体が統合することで、見事な形式美を創り出している。

■ヴェレシュ

ベラ・バルトックの
思い出に捧げる哀歌

ホリガールの作曲の恩師である

第656回定期演奏会
10月7日(土) 17:00
8日(日) 13:00
指揮 ハイנטツ・ホリガー
ソプラノ サラ・ウエゲナー

■ホリガー

薄明—ソプラノと
大管弦楽のための
3つの俳句

ホリガーはさらに「私が日本について知ることになった作曲家の武満徹の思い出にこの作品をささげたい。25分間、とても静かでゆっくりした音楽。オーケストラには色彩が求められる」とも述べている。武満作品のように始まりも終わりもない時空の中を、ソプラノがゆっくりとドイツ語の俳句を語るように歌っていく。歌詞には「薄明」「夕べ」「日没」「夜露」などの言葉が使われ、終わりの感覚が安堵感させたえながら示される。巨大

ホリガールの作曲の恩師であるヴェレシュはハンガリー出身の作曲家だが、後年スイスに亡命したことで、ハンガリー国内では演奏が禁じられ、半ば忘れられていた作曲家だった。しかし、近年、ホリガーやピアノニストのシフ・アンドラーシュらがヴェレシュ作品を取り上げるようになり、バルトーク、リゲティらをつなぐ重要な存在として再評価されるようになった。この曲は、リスト音楽院でバルトークからピアノを学び、さらに彼の助手となったヴェレシュが、アメリカに移住したバルトークの死を知り、亡くなった年の1945年に書かれている。

■フアリア

スペインの庭の夜

フアリアはスペインの国民主義作曲家と思われがちだが、パリに滞在中ドビュッシーなどの印象主義的な影響を強く受け、同じスペインの作曲家アルベニスやグラナドスとは異なり、スペインの民俗音楽の土臭い味をそのまま移すというよりは、これらを深く消化して芸術的なものを創造したと言える。この曲

■フランク

交響曲

作曲家には、喜怒哀楽が激しく、自己中心的で自己主張の強い人柄が多い気がするが、フランクは真逆の人で、信仰心が厚

■ラヴェル

組曲「クープランの墓」

フランスでは17世紀から過去の偉大な芸術家に、その人を偲んで作った作品について、「・・・の墓」と題する習慣があった。この曲は18世紀の偉大な音楽家クープランを礼讃するためにラヴェルが6つのピアノ組曲として作曲したもので、彼はこの曲を第1次世界大戦で戦死

この曲はホリガーが30年ほど前に来日した大晦日、彼の作曲の師匠シャヤンドル・ヴェレシュの病



ハイנטツ・ホリガー
2019年9月の札幌との共演より



サラ・ウエゲナー

©Simon David Tschann

■バルトーク

弦楽器、打楽器と

チェレスタのための音楽

指揮者パウル・ザツハーの委嘱によりバルトークは室内オーケストラのためのこの作品を1936年、夏休暇で滞在していたスイスで構想し、秋にブタペストに帰って完成させた。この年から亡命する前年の39年までバルトークは創作力が最も充実した時期であった。それ以前はハンガリー農民歌の諸特性を抽象した基調の上に印象派音楽と12音音楽の技法を取り入れ、独自の「配分法」による精密

ながら難渋な音楽をつくっていた。しかし、この頃から彼の独自の技法を維持しつつ、一時期よりは徹底的に駆使することは差し控えられ、作品は簡明直截となつて形式的にも古典的な秩序を尊重するようになった。

全曲はほぼ等しい長さの緩急一緩一急の4楽章からなり、後半の2つの楽章は、とりわけ民族的色彩が濃厚である。第1楽章のフーガ主題が、全曲の中心主題として各楽章に循環する。ピアノ、チェレスタを中心に、二つの弦楽グループが協奏的に動くことも大きな特徴だ。

の5つの詩」という表題で出版された。この妖艶な歌曲を管弦楽の伴奏で池田香織が豊かなメソソプラノで歌ってくれる。

■マラー

交響曲第7番「夜の歌」

今年の年間テーマ「夜」にぴったりの題名を持つこの曲は、マラー交響曲の中でも演奏される機会が少ない。純器楽による人気の高い第5番、第6番を含む3つの連続する交響曲では、どうしても影が薄くなってしまふのも事実。しかし、古典的な厳密な構成ながら厭世的な第6交響曲と比べ、楽天的でロマン的なこの曲は、独特の構成により実にマラーらしいに満ちた大曲である。「影のように」と記された第3楽章を挟み、性格の異なる「夜曲」が第2楽章と第4楽章に配されている。内容の濃い第1楽章と凄まじい創造的エネルギーに満ちた終楽章など、まさにマラーの作曲技法の頂

点を示す作品と言つて良い。

「三日月」シリーズ定期演奏会
第15回

11月21日(火) 19:00

指揮 マティアス・バームルト

ピアノ ゲルハルト・オピッツ

■間宮芳生

オーケストラのための タブロー2005

旭川市生まれで、青森市で育つた間宮芳生は、作曲とピアノを独学しながら東京音楽学校(現・東京藝術大学)作曲科に入った池内友次郎に師事する。外山雄三、林光と共に「山羊の会」を結成し、その後「十代の会」の創立に参加した。作品は、管弦楽、吹奏楽、室内楽、合唱など多岐にわたる。オケでも4作品を数える。この曲は、オーケストラ・アンサンブル金沢の委嘱で書かれた。冒頭から拍子木のような律動的なリズムと躍動的な旋律が力強く奏でられる。中間部からフルートやオ

ーボエなどの瞑想的な独奏や多彩な打楽器による神秘的な響きを味わうことができる。

■モーツァルト

交響曲第40番

いわゆる「三大交響曲」は、モーツァルト作品の集大成であり音楽史に燦然と輝く珠玉の作品群なのだが、作曲の経過については短期間で書かれ、具体的な演奏資料も乏しいため謎に包まれていることが多い。以前には、作曲家の生前に演奏されなかったのではないかと憶測もあつたが、モーツァルトは実際の音を聴いた後、手直しもしているようだ。3つの交響曲は、それぞれが実に個性的であり、第40番は、彼の交響曲中でわずかに2曲という短調作品の一つ。あのもの悲しくも美しい旋律ではじまる第1楽章は、聴き手に強烈な印象を与え、それまでの快活で明朗な古典派音楽とは一線を画するロマンティックな雰囲気漂わせている。当時新しい楽器だったクラリネットを加え、より豊かなオーケストレーションで仕上げている。

■ブラームス

ピアノ協奏曲第2番

最初のピアノ協奏曲が書かれてから二十年ほどして作曲されたこの協奏曲は、それまでのオケと対峙しながら華やかなピアノリズムが繰り広げられると言うよりは、ピアノもオケの一部のようにとけ込みながら、重厚な管弦楽を聴くような趣がある。ブラームスは、この二十年の間に2つの交響曲とヴァイオリン協奏曲をつくりあげ、管弦楽の醍醐味を完全に手中におさめた。その自信が交響曲のような4つの楽章に表れている。第1楽章は、ドイツの奥深い森を連想させるようなホルンをはじめる、力強い男性的な魅力に満ちている。緩徐楽章はチェロの独奏が美しく、ロマン的な情感を際立たせる。第4楽章は「ハンガリー舞曲」が聞かれ、決して難解ではないのだが、演奏は極めて高度な技術を要する。



ゲルハルト・オピッツ

©HT/PCM

第657回定期演奏会

11月11日(土) 17:00

12日(日) 13:00

指揮 下野竜也

メソソプラノ 池田香織

■ワグナー(ヘンツェ編)

ヴェーゼンドンクの歌

るだが、これが妻ミンナに知られ夫婦生活は破綻をきたす。だが、ワグナーとマテイルデの情事の結果から、その副産物として楽劇「トリスタンとイゾルデ」が作られ、マテイルデの詩に曲をつけたこの歌曲集が生まれた。この曲はマテイルデの誕生日に彼女へ贈られ、「女声のため

に彼女へ贈られ、「女声のため

に彼女へ贈られ、「女声のため

に彼女へ贈られ、「女声のため

裕福な商人ヴェーゼンドンクは、亡命時代のワグナー夫婦にチューリヒで家を提供した。しかし、事もあるうにワグナーはその恩人の妻マテイルデと深い関係になってしまう。人妻キラーのワグナーらしいとこ



©Naoya Yamaguchi



©井村重人

下野竜也

池田香織

©井村重人

からフルートやオ

(写真協力 札幌交響楽団)

あいだりぼん

コンサートマスター 会田莉凡さんに聞く

心から音楽ができる環境作りを

生まれた日に

ヴァイオリンと縁が

生まれは東京都世田谷区です。母はポップスシンガーでした。そのボイストレーナーの先生が「小栗旬」さん、「宮本亜門」さんなど名前や芸名を付ける方で、生まれてくる子供に「莉凡」という名前を提案してくれたそうです。両親は気に入って、生まれる前からその名にしようと決めていたといいます。父は音楽プロデューサーで、家では毎朝ビートルズのレコードが流れていました。

3歳から桐朋の子供のための音楽教室に入り、5歳になったころに演奏する楽器を選ぶこととなりました。実は、私が生まれた日は諏訪内晶子さんがチャイコフスキー国際コンクールで1位になったまさにその日で、私にヴァイオリンをさせたいと思っていた両親の思いを後押ししたのです。2019年に諏訪内さんにやつとお会いした時にそのことをお話ししたら、「えーっ！」と驚いて「そんなに月日が経ったのねーとおっしゃっていました。」

小さい頃、ヴァイオリンはたころに演奏する楽器を選ぶこととなりまして。実は、私が生まれた日は諏訪内晶子さんがチャイコフスキー国際コンクールで1位になったまさにその日で、私にヴァイオリンをさせたいと思っていた両親の思いを後押ししたのです。2019年に諏訪内さんにやつとお会いした時にそのことをお話ししたら、「えーっ！」と驚いて「そんなに月日が経ったのねーとおっしゃっていました。」



6歳 ヴァイオリンを始めたばかりの頃

くさんある習い事の一つでした。小学6年生までは生後11か月で始めた水泳も一生懸命やっついて、大会に出場したりしていました。ヴァイオリンの練習も1日1時間(笑)。ヴァイオリンストになろうとは、あまり考えていませんでした。でも音楽と交わっています。

私にはヴァイオリンがある

学校は東京学芸大学附属世田谷小学校と中学校です。時間割がないようなユニークな学校で、中学校では英語の授業が週6時間ありましたし、早くからダイベートにも取り組んでいます。

学校は東京学芸大学附属世田谷小学校と中学校です。時間割がないようなユニークな学校で、中学校では英語の授業が週6時間ありましたし、早くからダイベートにも取り組んでいます。

中学生になると友達



プロフィール

1990年生まれ。桐朋女子高等学校音楽科を経て、桐朋学園大学ソリスト・ディプロマコース修了。2010年第6回ルーマニア国際音楽コンクール弦楽器部門第1位、併せて全部門最優秀賞。ルーマニア国内4都市にてリサイタルツアーを行う。2012年第81回日本音楽コンクール第1位、併せて全部門で最も印象に残った演奏に贈られる増沢賞、レウカディア賞、黒柳賞、鷺見賞を受賞。ほか優勝、入賞多数。ソリストとしてルーマニア国立ラジオ響、東京響、東京フィル、大阪響、九州響など国内各地のオーケストラと共演を重ねる。宮崎国際音楽祭、サイトウ・キネン・オーケストラに毎年参加。2010年より11年連続で小澤国際室内楽アカデミー奥志賀に参加し、弦楽合奏では小澤征爾氏指揮のもとソリストやコンサートマスターを務める。CHANEL Pygmalion Days 2014アーティスト。NHK-BS「クラシック倶楽部」、NHK-FM「ベスト・オブ・クラシック」など出演多数。これまでに岩澤麻子、鷺見健彰、徳永二男の各氏に、室内楽を小澤征爾、原田禎夫、川本嘉子、ジュリアン・ズルマンの各氏に師事。2020年より京都市交響楽団特別客演コンサートマスターを務め、2022年4月札幌交響楽団コンサートマスターに就任。名古屋芸術大学特別客員教授、東京音楽大学指揮科特別アドヴァイザー。

中学生になると友達皆、勉強に励んでいました。自分は将来どうしようかという時、クラスメートたちに「莉凡はヴァイオリンがあるから良いね!」と言われて初めて「音楽の道」を意識し、5歳から通い続けて「音楽仲間」もたくさんいた桐朋女子高等学校音楽科ヴァイオリン専攻に進学しました。仲間たちがみんな1日に4時間



くらい練習すると聞いて「嘘だ」と思っていたのですが、入学してみんながそれ以上に練習していることを知り、まずショックを受けました。私は本当に1時間しかさらっていませんでした。ただ、5歳でヴァイオリンを始めた時に母と約束した「楽器は毎日持とうね」ということだけは守っていました。…当たり前のことです(笑)。

ケの必修は6単位、私の進んだソリストコースだとオケの授業は取らなくてもよいのですが、私は7単位(一)も受講し、好きなオーケストラと室内楽にばかり取り組んでいました。

「ソロ、ちゃんと弾いてる？」

弾いてる？」

高校卒業後、桐朋学園大学のソリストディプロマコースに受かって進学したものの、室内楽やオーケストラが大好きだったので、ソリストになる気はあまりありませんでした。大学のオ

大学3年生の時、徳永二男先生に推薦していただき、日本中のオーケストラの首席奏者が集まる宮崎国際音楽祭への参加が叶いました。テレビやホールで見ることがなかった先生方と同じ舞台上立つことができ、その音圧と音色の豊富さに圧倒されっぱなしの日でした。音楽祭を通じて色々な先生と出会うことができただけで、私はオーケストラにトゥッティ奏者として入団を目指して、大学在学中にオーディションを受け始めようと思



ゲストコンマスを務めた

2020年11月の公演で

「シンドラーのリスト」のソロも演奏

近ソロをちゃんと弾いてる？」と言われたのです。なんでソロを？と思っていると「オーケストラのオーディションは必ず協奏曲のソロを弾くんだよ。ソロ弾けないと受からないよ！」と教わりました。物凄くハツとさせられ、ソロを真剣に勉強するにはどうしたら良いかと考えてかかって3度挑戦して本選には進めなかった日本音楽コンクールをもう一度受けてみることにしたので。結果はまさかの1位。翌年は優勝者ツアーに始まり、演奏会の依頼が次々と来てコンチェルトのソロやリサイタルで

スケジュールは埋まっていきました。「オーケストラに入るのは、もう少し先かなあ？」と思っていたところ、音楽祭などでお世話になった先生方に「コンサートマスターに興味があるんだって？」と声をかけていただき、そこから全国のオーケストラにゲストコンサートマスターとして呼んでいただく機会に恵まれました。ゲストコンマスタだけでなく、アシスタントコンマスやトゥッティ奏者などで全国様々なオーケストラにお世話になりました。色々なところに行き、たくさんのお会いが楽しかったので、このままフリーでもよいかなと思っていた時、京都市交響楽団から声をかけていただいたのです(2020年4月、京響の特別客演コンサートマスターに就任)。

自分はうまくなれるかも

オルゴールを買ってもらったりしたのをよく覚えています。2018年夏には東京フィルハーモニー交響楽団による文化庁の学校巡回公演にゲストコンマスとして出演し、稚内、豊富、増毛、小樽、札幌と道内各地を訪れ、7月の一番良い季節に北海道を満喫しました。

2019年末、大平まゆみさんが退団されることになった札幌から連絡があり、約1か月後の2020年1月に北広島ニューイヤールにゲストコンサートマスターとして出演することになりました。それが最初でした。他にもいくつも出演が決まっていましたが、コロナ禍でいったん全てがストップしてしまいました。演奏会が再開されたその年の秋(2020年10月)、札幌にはいり早くゲストコンマスとして呼んでいただきました。全員がKlaraでの音を理想としているのでまとまりがあり、柔らかい印象を受けて素晴らしい経験でした。また、各セクションに个性的なスタープレイヤーがそろっているこのオケだったら「も

名前つながりでリボンナポリンの

リボンちゃんが応援に



しかして自分はいまよくなれるだろうなと感じていたところ、ほどこなくして正式オフアアの電話をいただき、驚いたのと同時に本当にうれしかったです。

室内楽のようなオーケストラ

それぞれの奏者が良いと思うタイミングで、心から音楽できる環境にあるのが良い響きのするオーケストラだと思っていて、その環境づくりに率先して取り組むコンマスでありたいと、毎日過ごしています。札幌は各楽器のリーダーだけ



2022年4月 コンマス就任お披露目の定期演奏会

どを札幌はどのように表現していくかなど、その引き出しをいっぱい作っておくことが大事だと思っております。札幌に来てからは、もつとうまくになりたいと思つて練習量が増えました(笑)。

札幌では毎回「しめパフェ」に「ジンギスカン」に「書ききれません」などを楽しんでいます。趣味やストレス解消法などをきかれると本当に困つてしまつて…。オーケストラが楽しいからかもしれません。あえていうなら、食べることをして買ひ物が好きです。北広島にあるアウトレットは欲しい物が揃つていて、屋内なのもよいですね。季節に一回は行ってしまいます。

オケも室内楽も楽しみです

まだまだオーケストラの曲で

弾きたい曲がたくさんあるので色々弾いていきたいと思つています。好きな作曲家は、マーラー、ブルックナー、リヒャルト・シュトラウスにワーグナー、オーケストラでしか演奏できない曲に魅力を感じます。また、札幌

で素晴らしいメンバーたちと出会うことができたので、色々な編成の室内楽にも取り組んでいきたいです。4月のロビーコンサートで演奏したメンバーを中心にリッカ弦楽四重奏団を結成し12月にはコンサートを開催することにしました。ぜひ皆様いらしてください。

札幌くらぶの会報は、カラー印刷でポップな印象です。豊平館でのサロンのレポートではみんな一生懸命考えたプログラムでやっているなあど知つたり、札幌メンバーの様々な面も紹介されていて、毎回楽しく読んでいます。

これから北海道の各地を訪れることも楽しみに、まずは皆様にたくさん聴いていただき、楽しんでいただけますよう頑張ります。今後ともどうぞ！よろしくお願いたします!!

でなく、全員がアンサンブルにたけていて、好きだと感じます。音の重ね方を知っていて、ただ上手に弾くだけではなく、音楽を聴いてこうメロディーがきたらこう支える、今度はこの上にメロディーが乗ってくる、といったやり取りが起きていて、それを楽しめることができる、まさに室内楽のように演奏できるオーケストラです。それも弦楽器の中だけにかぎらず、金管、木管楽器、打楽器とも室内楽のようにやりとりができていると感じる瞬間がたくさんあり、さらに増えています。

昨年度は札幌に約120日間滞在しました。忙しいでしょうか？とよく言われますが移動は苦になつていません。新幹線や飛行機などの乗り物が好きなのかもしれません。出演のスケジュールや移動の手配まで全部自分で管理しています。この5月だと宮崎から東京、札幌から東京を経由してまた宮崎、京都、東京、札幌、そんなひと月でした。体力には自信があつて、今でもプールに行くといくら平気で泳げます。それに食べるのが大好き。何といっても京都と札幌は有名な観光地でどこも美味しいものがいっぱいあります。札幌



2023年6月 札幌でのオフのひとコマ

ヴァイオリンの桐原宗生さん、ヴィオラの鈴木勇人さん、チェロの石川祐支さんと12月にコンサートを行い、ハイドンとショスタコヴィチ、ブラームスの弦楽四重奏曲を演奏する予定です。きつとよい演奏ができるので、私自身も物凄く楽しみにしています。コンサートマスター 会田莉凡

リッカ弦楽四重奏団

2023年 12月13日(水)

ふきのとうホール

18:30 開場 19:00 開演

全席自由 3000円

リッカ 祐支、石川 祐支、会田 莉凡、鈴木 勇人

チケットお取り扱い: 会田 莉凡

お問い合わせ先: va_sorukikavast@gmail.com

リッカ弦楽四重奏団 12月13日(水) 19時開演 ふきのとうホール

文屋治実さん主催、澤和樹先生をお迎えしての室内楽シリーズに初めて参加します。市川映子さん、廣狩理栄さんも一緒に、演奏機会の少ないグラグノフと名曲シューベルトの弦楽五重奏を演奏します。凄い演奏会になること間違いなしです。皆様是非お越しください!

ヴィオラ 榎本 朱音

弦楽五重奏の夕べ

澤和樹と仲間たち Vol.2

9.19(火) 19:00開演

ザ・ルーテルホール

プログラム: グラグノフ(1865-1936) 弦楽五重奏曲 4長調 op.39, Fシューベルト(1797-1828) 弦楽五重奏曲 ハ長調 D956

入場料: 一般 3,500円、学生 2,000円

主催: 文屋治実

協賛: 札幌市文化振興局

弦楽五重奏の夕べ 9月19日(火)19時開演 ザ・ルーテルホール



PMF 渡辺史子さん

5月15日、ライラックが香る新緑の中島公園は池に面して仲良く寛いでいる人達やオシドリの番が泳いでいる豊平館の前の池を見ながらサロンに向かった。

高木事務局長の挨拶で始まり、上野さんから出演者のプロフィールとプログラムの説明。

第1部 PMF開幕前ブレストーク

講師はPMF組織委員会事業課長の渡辺史子さん、PMFの歴史と共に活躍してきた方で、主にアーティストとの交渉、スケジュールの調整、公演全体の企画など重要なお仕事に関わっている。第1回目の公演は、北京の開催予定であったが、1989年天安門事件で政局が不安定となり、日本国内から候補地を探すことになった。軽井沢、箱根、広島、札幌などの中から梅雨のない札幌が楽器に良いこと、芸森の野外ステージが建設予定であったこと、札幌があつてクラシックファンも

バーンスタインの遺志と 美しい音色に癒されたひととき

はげもとあかね
ヴァイオラ奏者 榎本朱音さん



多いことなど条件が揃っていたので札幌に決まったとのこと。

① 第1回PMFの1990年開催の時のバーンスタインの言葉

「世界中から言葉や文化、環境の違う人が集まって、若手音楽家がオーケストラを作って、その人たちが一つになって音楽を奏でて、その音色を多くの人たちに聴いてもらって、感動を分かち合う、それが世界の平和につながるべく、そのためにPMFを作るのだ」と言っていて創設された。第1回目PMFオーブニングの時のバーンスタインのスピーチの一部を紹介しましょう。「...残ったエネルギーを神が与えたもうた時間を教育に捧げ、私が知っていることすべて、分かち合えるものは何でも、多くの若い世代、そのなかでも特に若い人たちと分かち合う

べきだと。音楽についてだけではなく、芸術についても、そして芸術についてだけではなく、芸術と人生の関係についても」と訴えられた。この3か月後にバーンスタインは逝去された。

② アカデミー生の札幌での約1か月の過ごし方

今年は32回目。26か国からの応募者1900人位の中から74名が決まった。年々倍率が上がっている。滞在費はすべてPMFが負担する。アカデミー生の生活は、到着翌日にはキタラ小ホールでオリエンテーションを受け、キタラの施設利用、教授陣の紹介、バーンスタインのピアノのスピーチを聞いてPMFの精神や歴史を理解してもらう。その後、過密スケジュールでオーケストラの編成、リハーサル・自主練習がスタートする。特に体調管理は大切なため食事には気を付けている。午前、午後の練習時間はそれぞれ2時間半。

③ 歴代の指揮者、アーティストの裏話

その中でも苦小牧公演の前日、本番にも間に合わない指揮者から連絡、そのやりくり演奏順序を変えたり、室内楽を入れたりして何とか間に合わせたことなど。個性の強い指揮者が多く、指揮者とお客さんとの間で大変な苦労をされたこと。

④ 札幌とPMFについて

札幌には12人のPMF修了生がいる。PMFを経験した後、札幌が気に入って札幌に入団される方もいるとのこと。

⑤ 今年の聴きどころやPMFの内容の紹介

第2部 ミニコンサート

札幌ヴァイオラ奏者榎本朱音さん ピアノ永沼絵里香さん

ヴェータン：無伴奏ヴァイオラのための奇想曲
「バガニーニへのオマージュ」ヴィオラ単独の演奏を聴くのは久しぶり。哀愁に満ちた旋律から力強い音色へと。弦を次々と押す素早い指の動きを近くで見ているとその迫力が伝わってきた。

ニーノ・ロータ：「インテルメッツォ」情緒的なところとテンポの速いところなど、印象に残るメロディが多い。ヴァイオラとピアノのハーモニーが心地良かった。

プロコフィエフ（ボリゾフスキー編）：バレエ音楽「ロミオとジュリエット」より、愛を確認しあう場面までの情緒的な、そしてリズムミカルのところなど。特に「街の目覚め」のところのピチカートが凄いい。

ピアノラ・タンゴの歴史より3曲「ボードレール1996」のところで、ピアノの永沼さんがボディを打楽器に。終了後、鳴り止まない拍手により、アンコールでピアノラのタンティアンニプリマが演奏された。静かで情緒たっぷりな旋律、次第に静かな音色に変化して終了。朱音さんの深みのある美しい音色と笑みがこぼれるトークにすっかり癒されました。

閉会は八木先生の挨拶、いつものようにコミカルに話され、皆さんの笑いを誘ってくれた。青木晃一さんと永沼絵里香さんからはリサイタルのご紹介。

バーンスタインの芸術と教育そして平和への熱いメッセージとコンサートの余韻に浸りながら小雨の中を帰路についた。

JOFCC山形昼食会 + 東北UNITED鑑賞会開催

JOFCC(日本プロオーケストラファンクラブ協議会)山形総会は2020(令和2)年から新型コロナウイルスの影響で開催の延期が続き、コロナが5月に5類相当に移行したことに伴い、これまでの規制がなくなり開催環境は整ったが、山響ファンクラブの準備が整わず、短い準備期間で開催できる食事会+演奏会という形式で今年開催することとし、4年ぶりにJOFCC会員の方々と顔を合わせ、久闊を叙する場として親交を深めることができました。

会員は山形駅直近の霞城セントラル24階展望ロビーに集



参加した皆さん(霞城セントラル24階展望ロビーにて)

合、山形交響楽団専務理事西濱秀樹氏の歓迎の話を聞き、参加者全員で集合写真を撮り、旬菜四季ひろげんに移り昼食会、メニューは幕の内弁当に茶碗蒸し、2種類の副菜に香の物、吸い物、食後には抹茶のロールケーキと珈琲が付いた、それなりに豪華な昼食でした。

その後、徒歩1分程度でやまぎん県民ホールに移動する、山形駅から続く連絡通路の道すがら、同ホールで開催されるオペラやバレエ公演のポスターや横断幕が多く掲示されていた。

東北UNITED山響×仙台フィル合同演奏会は、パスカル・ペロ(仙台フィル桂冠指揮者)の指揮で、前半はドビュッシー

／牧神の午後への前奏曲、ラヴェル／ダフニスとクロエ第2組曲の2曲、後半はラヴェル／高雅で感傷的なワルツ(管弦楽版)、ラ・ヴァルス、ボレロの3曲、アンコールはドリーブ／バレエ「 Coppélia」よりスワニルダのワルツと同曲の終わり部分30秒ほどでしたが、オールラヴェルともいえるプログラムでした。

コンサートは、ペロのダイナ

山形駅からの連絡通路の公演ポスター、横断幕掲示



ミックで繊細な指揮振りで、演奏曲の感情を見事に表現され、ブラボーが長くやまなかった。今回の山形昼食会+東北UNITED鑑賞会は来年開催を予定しているJOFCC第14回総会山形総会の予行的な開催ですが、参加された方々の満足感を見るに、4年ぶりの再会は今回の総会もきつと大成功なものになると感じました。

札響くらぶ 副会長 武藤義典

サロメの官能と陶酔と美の矛盾

Hiromi オペラプロジェクト 新国立劇場オペラ「サロメ」

聖書のマタイとマルコの福音書に記述があるこの物語。福音書では娘サロメはその名前すら登場せず、元々主役は母親のヘロディアスだった。16世紀から17世紀にかけて少女と生首というモチーフが好まれ、多くの巨匠が宗教画という概念の中で自らのオリジナルな表現を確立していった。ルネサンス盛期からバロックにかけての巨匠ティツィアーノ然り、敬愛するカラヴァッジョ然り。その後の19世紀、ギュスターヴ・モローの「出現」の登場ま

で200年余りの間、サロメは西洋美術史の中で忘れ去られてしまう。象徴主義の旗手モローが描くサロメは、ヨカナンの首は空中に浮遊し、7つのヴェールの踊りを踊るサロメと対峙する。サロメIIファムファタルとするモローの象徴主義的表現にインスパイアされたオスカー・ワイルドの戯曲とオーブリー・ビアズリーによるモノトーンの悪魔的な美しさを持つ挿絵によりサロメ像が確立され、更には戯曲を観たりヒヤルト・シュトラウ

スが曲を付けオペラを書き上げた。

時代を超越し、それぞれの芸術家達により引き起こされた化学反応を、現代に蘇生するべく我らが札響と新国立劇場が創造するその瞬間は何とも感慨深く心惹かれるばかりである。

有名なアリアがある訳でも無くレチタティーヴォ風な淡々とした流れの中、ワグナー的なライトモティーフと不協和音を多用し、絶え間なく流れる音楽はサロメとヨカナンの俗物的で不道徳な会話に反して実に美しいという矛盾。ヨカナンの首を愛でるサロメのグロテスクで狂気に満ちた場面でも耳に入ってくる音楽はこの上なく神聖という矛盾。

目の前で起こっているこの惨劇はもしかして美しくともハッピーな事なのでは?といった錯覚に陥る程の怪しさに満ちている。

エキゾチックな東洋のダンスを奇想させるオーボエや、首を待つシーンでのティンパニの不気味な音。井戸

の底の物音や首を切る音を表すコントラバス等々細部に渡るオーケストレーションが物語への没入感と緊張感を増幅させる。これらは全てこのスコアの細部まで熟知した指揮者コンスタンティン・トリンクスのアグレッシブな導きと情景描写音楽の再現性の高さが際立つ札響との見事なコンビネーションの賜物と言える。

歌手もオケも近年稀に見る名演だった。加えてこの日の白眉は個人的には出口の見えない討論から始まるユダヤ人の5重唱だった事も付け加えておく。

先頃の定期演奏会で広上先生が「札響は世界レベルです!」と仰っていたのがいよいよ現実味を帯びてきた気がしてならない。

会員/吉川宗男



ギュスターヴ・モロー「出現」

第654回札響定期演奏会

若さがはちぎれるラフマニノフ

チャイコフスキーとともに、短調好きの日本人のふところ深くにしのびよるラフマニノフの音楽。そのラフマニノフの最高傑作としてのピアノ協奏曲第3番ニ短調を、シヨパン国際ピアノ・コンクール2位入賞の反田恭平氏が札幌交響楽団と協演するというので、大きな期待を抱いて札幌コンサートホールに足を運んだ(6月24日)。



(写真協力 札幌交響楽団)

9 考えてみれば、僕が出かけた過去2回の反田氏の演奏会はずべてシヨパンの作品を揃えたりサイタルであった。そのような意味で、芸域の拡大と深化に余念がない若きヴィルトゥオーソの姿にも関心が寄せられた。

乾き気味の淡々とした音色による第1主題の提示から圧倒的な熱量で築き上げられるクライマックスまで、技術的曖昧さとは無縁の世界が繰り広げられた。弦楽器の数が絞られていたこともあって、この作曲家の協奏作品にありがちな、ピアノがオーケストラに埋没する不安もなく、独奏楽器が力強く自己を主張していた。若さがはちぎれていた。

なかでも、第1楽章の豪快なカデンツァや最終楽章短いカデンツァ以降の盛り上げ方は特筆もので、聴衆の生理的快感さえ呼び込んだ。そのスケールの大きさに、とにかくブラヴォーである。

しかし、ピアノの音の粒ひとつひとつが客席の隅々まで満遍なく届けられるものの、高揚感が沸点まで達しないもどかしさが残ったのも事実であった。別の言い方をすれば、夜霧にけぐるロシア的憂愁が希薄でこの作品のもうひとつの魅力が伝わってこなかったのである。輪郭の明快な乾ききった音と超絶的な技巧を駆使しながらも、それだけに終わらずに、背後にロシアのメランコリーをしつとりと漂わせていたワイセンベルクに懐かしさを覚えるのは酷であろうか。

オペラの引越し公演に 行って来ました

無限の可能性を秘めた若きヴィルトゥオーソ反田氏、弾き込みを重ねることによる音楽

のいつその熟成を楽しみにしている。演奏会の後半には、ドビュッシーとラヴェルの管弦楽作品が並べられていた。ロシアの文化が地理的に近いドイツを超えて、むしろフランスから多くの影響を受けたことを顧みれば、プログラム内容は考え抜かれたもののように思われる。ここでも札響は輝かしい音楽を提供してくれた。

会員／村岡範男

クラシックコンサートに行くようになってから、少しずつオペラに興味を持つようになり、たまに見る機会にも恵まれるとオペラがだんだん好きになってきました。映画館でメトを見に行ったりしているうちに、このメロディは？このアリアは？と曲や出演者を調べ楽しみも増してきたものです。

そんな時コンサートホールで配られるパンフレットの中に「オペラハウスの引越し公演」の案内がありました。引越

引越して来ました

越し公演って何だろう？荷物運んで来るの？調べて見ると、海外で公演しているオペラの団体が指揮者や歌手の他、オケや合唱団に裏方まで劇場

総出で来て開催するのをそう呼ぶとのこと。(引越しを頼むのは目通かな？札通かな？)今回見たのは、昨年来日予定だったがコロナで延期になったシチリアのパレルモ・マッシモ劇場(Goddfrazer Park 3にも出てくる)です。日程は6月15日と17日がラ・ボエーム、16日と18日が椿姫。せっかくなので15日と16日で両公演を見てください。15日のラ・ボエームは今人気のウツトリオ・グリゴロにソプラノのアンジェラ・ゲオルギエ

入会案内をリニューアル

「札響くらぶ」入会の案内が新しくなりました。活動の目的と内容、新規入会申込について紹介した内容です。お知り合いで札響くらぶの活動に興味のある方がいらっしゃいましたら、このパンフレットをお渡しして入会をお誘いください。会員の高齢化に伴い退会者が増えており、将来の運営を担う会員の減少が課題となっております。パンフレットは札響定期演奏会会場に設置される「札響くらぶデスク」に有りますので、ご協力お願いします。



また来る時には是非行きたいと思えます！

会員／神秀夫



僕の愛聴盤⑥

「これぞドイツ音楽のたたずまい」

Oライオン・ソナタ全3曲

（ブラームス

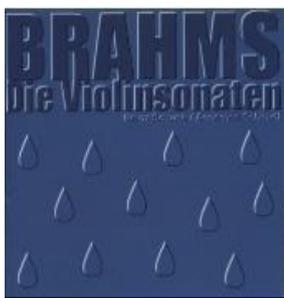
ハインツ・シュンク

（ヴァイオリン）

アンネローゼ・シムント

（ピアノ）

（87年、90年録音）



深々とした抒情は特筆ものであろう。

惚れた者の弱みであろうか、僕のコレクションもいつの間にか50種を超えた。名演がひしめくディスクの中で、旧東ドイツで活躍したシュンクの清楚な演奏スタイルが一際精彩を放つ。巨匠風の芸域とは一線を画すというものの、ブラームスの音楽に内蔵される熱っぽさを失うことなく、ヴァイオリンという楽器の歌謡性を控えめに表出した、彼の芸術家としての姿勢とセンスに拍手を送りたい。第1番と第3番の緩徐楽章における重音奏法は、作品そのものの持つ熟成度に格調の高さを添えている。

ベートーヴェンの10曲のヴァイオリン・ソナタを超える、味わいに満ちた稀有の音楽、自己の作品に厳しい姿勢で対峙しながらも、善良な小市民的芸術家としての作曲者のやさしい眼差しがのぞく。満ち足りた「時」を約束するディスクの決定盤である。

オリオン・ソナタの、内省的で

Oライオン・ソナタ

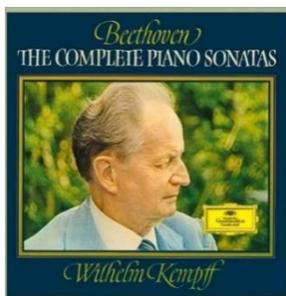
第30番、第32番

（ベートーヴェン）

ウィルヘルム・ケンプ

（ピアノ）

（64年録音）



月の光が柔らかな光沢を伴って室内に降り注ぐ夏の宵、そして木枯らしの乾いた騒めきが孤独感を募る晩秋の夕暮れ、

ベートーヴェン晩年の孤高の輝きが当時高校生だった僕の

心の奥深くを照射した。ウィルヘルム・ケンプの、経験に裏打ちされたいぶし銀の響きがモノログのように、僕たちに対峙する。確信に満ちた楽曲構成、練りに練られた音色、絶妙の節回し、音符と音符の間を漂う高貴なたたずまいは、ドイツの巨匠の名に恥じない豊かな説得力で聴く者の心を包み込む。大音量での威圧的ならうたえかけではない、淡々とした信条の吐露が心地よく、作曲家が意識的にちりばめた変奏曲やフーガの色合いの変化も絶品である。

ピアノ音楽の最高峰にそびえ立つがゆえに、マウリツィオ・ポリニ、ヴラディミール・アシケネナージ、アンドラーシ

フルート協奏曲の中に
K467が

7月23日（日）「PMFホストシテイ」に出かけた。

フルートのプリアコフさんは2009年から日本各地でたびたびリサイタルを開いており、2011年には札幌でも開催された。その時のスペシャリストが、森圭吾さんと高橋

聖純さんであった。プッツのフルート協奏曲は

ユ・シフなどテクニックに自信をもつ、その時々のヴィルトゥオーソたちがこれらの作品に果敢に挑んできたが、たとえ技術に遜色があったとしても、僕は長年ベートーヴェンを弾きこんできたケンプの演奏になんとも言えない親しみをおぼえるのである。経験がもたらしたコクと言ったらいいであろうか。

初めて接してから半世紀以上の時を刻んだが、僕の愛聴盤としての地位はいささかも色褪せてはいない。

ドイツ教養主義を地でいくケンプ盤に喝采あれ。

会員／村岡範男

3楽章のワルツだけは優雅に踊り出すように（川瀬さんも）演奏され、他の楽章とのコントラストが際立っていた。

当日の客層はいつもと少し違っていた。演奏後に各奏者が立って拍手を受ける時に上がった声は、いつもは聞かれない「ワー「ウォー」であった。PMFのメンバーが仲間にかける応援、賛美の声のように聞こえた。

会員／村山英明

▼毎年ある画家の「アトリエ記念館」で命日にミニコンサートが開催される。今年も田島夫妻がお願いした。心温まる演奏を聴き、美味しい料理とワインなどをいただきながら、亡き先生を慕う人々が和やかに集う。贅沢な夏の午後の一ときであった。（井上）

スタッフの声

▼東京や大阪に出かけて札幌に帰ってくると、札幌の人の歩き方はのんびりしているなあと感じる。地下鉄の停車時間までも少し長いのはどと感じてしまう。これは札幌に帰って来た直後の感想であるが、その「のんびり感、ゆったり感」が心地よいのだろうか、いつの間にかその中に埋没してしまう。（村山）

▼鉄道駅には、駅特有の発車メロディーが設定されていることがありますが。大阪のJR新今宮駅の発車メロディーは、「ドボルザーク交響曲第9番「新世界」より」第4楽章。近くには大阪の代表的観光地「新世界」。ドボルザークとは少しイメージが違う気がします。（有田）